二〇二四年度 大学入学共通テスト 解説〈現代文〉

第1問　評論　渡辺裕（わたなべひろし）『サウンドとメディアの文化資源学――境界線上の音楽』

［総　括］

第一問の評論文は、「鑑賞」のまなざしによって成り立つ「音楽」や「芸術」という概念の自明性を問い直すものであった。昨年、一昨年と続いた複数テクスト形式ではなく、本文と「生徒の書いた【文章】」からなるシンプルな形式であったが、本文の字数は昨年よりもやや増加した。なお、「センター試験」二〇〇四年度の本試験の第一問で出題された『聴衆の「ポストモダン」？』は同一著者による文章である。

問1の漢字問題は全5題とも傍線部の漢字に相当する漢字を含むものを選ぶ問題であり、2年連続で出題されていた「漢字の意味の理解を問う問題」がなくなった。**問2**～**問5**は本文からの出題（**問5**は「文章の構成・展開に関する問題」）、**問6**は本文を読んだ「Sさん」が自分の書いたレポートを推敲する、という形式で(i)～(iii)までの小問が付された。

全体としてシンプルな形式だった上、紛らわしい選択肢も少なく、昨年度と比較して易化したように思われる。

［解　説］

問1　漢字問題　基礎

傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の ① ～ ④ のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア) 掲載　①啓発　◎②掲出　③契機　④系図
(イ) 活躍　①ご利益　②倹約　◎③躍如　④役職
(ウ) 催し物　①採択　◎②催眠　③喝采　④負債
(エ) 悪弊　①公平　◎②疲弊　③幽閉　④横柄
(オ) 紛れ　①噴出　②分別　◎③紛糾　④粉飾

問2　理由説明問題　標準

傍線部A「これが典礼なのか、音楽なのかという問題は、実はかなり微妙である。」とあるが、筆者がそのように述べる理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

傍線部中の指示語「これ」は、第1段落で説明されていた「モーツァルトの没後二〇〇年を記念する追悼ミサ（における《レクイエム》）」を指す。また、傍線部の「微妙」という言葉は〈どちらとも言えないほど複雑できわどいこと〉を意味する。したがって設問で要求されているのは、「モーツァルトの追悼ミサ（における《レクイエム》）が、実は典礼とも音楽ともどちらとも言えない微妙なものであると筆者が述べる理由」である。「実は」とある以上、理由は傍線部よりも後ろ（第5段落以降）で説明されているはずだ。

この「追悼ミサ」をどう捉えるかについては、本文で三つの立場が述べられている。

❶宗教行事・典礼というコンテクスト（文脈）から切り離し、モーツァルトの《レクイエム》という音楽作品として鑑賞する立場（主に第2段落）

❷モーツァルトの音楽を含む宗教行事・典礼として捉える立場（主に第3段落）

❸モーツァルトの音楽を含む宗教行事・典礼の全体を「作品」として鑑賞する立場（第6段落）

筆者の立場は❸である（第6段落最終文「ここで非常におもしろいのは、……典礼をも巻き込む形で全体が「作品化」され、「鑑賞」の対象になるような状況が生じているということである」）。そしてこの❸の立場については第7～8段落でも、より一般化された形で説明されている。したがって、第6段落までで十分に理解することができなければ、傍線部Bを超えてさらに先まで読み進むことも、正解を選ぶための有効な手立てとなるだろう。

選択肢の中で❸の立場を正しく説明しているのは⑤だけなので、正解は⑤。

①は「典礼の一部なのであり、典礼の全体を体験することによって楽曲本来のあり方を正しく認識できる」とあり、これは❷の立場なので不可。

②も「独立した音楽として鑑賞できる」が❶の立場なので不可。

③も「音楽として典礼から自立することにもなった」が❶の立場なので不可。

④は「典礼が音楽の一部と見なされるようにもなっていった」が誤り。典礼（音楽でない部分）が音楽の一部となったのではなく、典礼（音楽でない部分）と音楽の全体が『作品』として鑑賞されるようになったのである。

問3　内容説明問題　標準

傍線部B「今『芸術』全般にわたって進行しつつある状況」とあるが、それはどのような状況か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

傍線部Bの状況は、直後で「『博物館化』、『博物館学的欲望』などの語で呼ばれる、きわめて現代的な現象」と言い換えられており、それは**問2**で確認した❸の立場を一般化した状況でもある。そしてここでも**問2**で確認したのと同様の三つの「鑑賞のまなざし」が第7～8段落にかけて説明されている。

❶様々な作品を現実のコンテクストから切り離し、「作品そのもの」を鑑賞するまなざし
❷作品を、それが置かれていた現実のコンテクストの中に戻して鑑賞するまなざし
❸作品が置かれていた現実のコンテクスト、ひいては現実の都市の様々な空間を「作品」として鑑賞するまなざし

傍線部Bの状況（＝「博物館化」）とは、右の❸のまなざしが生み出す状況である。それを正しく説明している①が正解。

②は「美術館や博物館内部の空間よりもその周辺に関心が移り」が誤り。

③は「施設の内部と外部の境界が曖昧になってきたという状況」が誤り。

④の後半は正しいが、前半が誤り。「生活の中にあった事物が美術館や博物館の内部に展示物として取り込まれるようになったことで」という部分は、生活というコンテクストから事物だけを切り離して鑑賞する❶のまなざしの説明。

⑤は「町全体をテーマパーク化し人々の関心を呼び込もうとする都市が出現してきたという状況」が誤り。傍線部Bの状況とは、第6段落までに述べられていた「モーツァルトの追悼ミサ」を鑑賞するまなざしにも当てはまるものでなければならない。

問4　理由説明問題　標準

傍線部C「なおさら警戒心をもって周到に臨まなければならないのではないだろうか」とあるが、筆者がそのように述べる理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

筆者が「警戒心をもって周到に臨まなければならないのではないだろうか」と述べるのは、傍線部の直前にある「『音楽』や『芸術』という概念が自明の前提であるかのように考えてスタートしてしまうような議論」に対してである。なぜ、「音楽」や「芸術」という概念を自明の前提とする議論に対して警戒する必要があるのか。その理由を本文から探ると、第10段落の冒頭に端的な説明がある。「『音楽』や『芸術』は決して最初から「ある」わけではなく、「なる」ものである」というのがそれだ。何が「音楽」か、何が「芸術」かは、最初から決まって「ある」ものではない。音楽や芸術は、何を音楽と見なすか、何を芸術と見なすかという、人々の「『鑑賞』のまなざし」によって音楽／芸術に「なる」。にもかかわらず、それらを自明の前提としてしまえば、第10段落の2文目にあるように「いつの間にか本質化され、最初から『ある』かのような話にすりかわって」しまうだろう。したがって「警戒心をもって周到に臨まなければならない」。このような理解で選択肢の検討に入ると、正解は⑤。

①は「博物館学的欲望」が誤り。「コンサートホールや美術館の内部で形成された」のは「博物館学的欲望」ではなく、「『鑑賞』のまなざし」である。

②は「『音楽で世界は一つ』などというグローバリズムの論理に取り込まれてしまうから」が誤り。それは「音楽」や「芸術」という概念を繰り返し使う結果、起きてしまうかもしれない可能性の一つにすぎない。

③は「コンサートホールや美術館といった『聖域』が外部へと領域を広げていった」が誤り。そうではなく「『鑑賞』のまなざし」が「聖域」を超えて広がっていったのである。

④は「『音楽』や『芸術』は、コンサートホールや美術館の中で生まれた価値観やイデオロギーを媒介として形作られてきた概念である」が誤り。傍線部Cの次の文「このような状況（「博物館化」という状況）自体、特定の歴史的・文化的コンテクストの中で一定の価値観やイデオロギーに媒介されることによって成り立っている」と④の前半部では主語が異なる。また、④の後半の「力学の変容過程を明確にする」も誤り。本文では「～力学や、そういう中で『音楽』や『芸術』の概念が形作られたり変容したりする過程やメカニズムを明確にする」とある。つまり明確にすべきは「～力学」と、「概念」の「変容過程」であり、「力学の変容過程」ではない。

問5　文章の構成・展開に関する問題　標準

この文章の構成・展開に関する説明として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。

各選択肢の内容を、本文の該当箇所と照合し、「適当でない」選択肢を選ぶ。

①、②、④は適当。

③の「7段落は、前段落までの議論をより一般的な事例を通して検討し直すことで新たに別の問題への転換を図っており」は不適当。第7段落は前段落までの〈モーツァルトの追悼ミサ〉に関する具体的な議論を、「芸術」全般にわたる状況として一般化しているのであり、「新たに別の問題への転換」は図られていない。正解は③。

問6　生徒の書いた【文章】の推敲に関する問題　(i)・(ii)標準　(iii)応用

【文章】は「作品を現実世界とつなげて鑑賞することの有効性について」述べたもので、二つのベクトルの異なる鑑賞の仕方が提示されていた。

❶作品と重ね合わせて現実を鑑賞する（作品→現実）
❷現実と重ね合わせて作品を鑑賞する（現実→作品）

(i)　Sさんは、傍線部「今までと別の見方ができて」を前後の文脈に合わせてより具体的な表現に修正することにした。修正する表現として最も適当なものを、次の ① ～ ④ のうちから一つ選べ。

傍線部の置かれている文脈に留意する。「小説を読んでから訪れてみると、今までと別の見方ができて」という文脈なので、右の❶（作品→現実）に当たる。選択肢の中で❶に当たるのは①のみ。正解は①。

(ii)　Sさんは、自身が感じ取った印象に理由を加えて自らの主張につなげるため、【文章】に次の一文を加筆することにした。加筆する最も適当な箇所は(**a**)～(**d**)のどの箇所か。後の ① ～ ④ のうちから一つ選べ。

加筆する文章は「現実の空間に身を置くことによって得たイメージで作品を自分なりに捉え直す」というものなので、右の❷（現実→作品）に当たる。したがって、適当な箇所は(**c**)か(**d**)のどちらか。(**d**)の直前の「作品が新しい姿を見せることもあるのだ。」という断定の文末表現に着目すると、ここで❷の話に一区切りついたと考えられるので、その後に加筆する（(**d**)に入れる）のはおかしい。したがって正解は③。

(iii)　Sさんは、この【文章】の主張をより明確にするために全体の結論を最終段落として書き加えることにした。そのための方針として最も適当なものを、次の ① ～ ④ のうちから一つ選べ。

「全体の結論」なのだから、❶・❷いずれかに偏った内容ではおかしい。❶・❷を踏まえた内容（作品⇅現実）になっている②が正解。

①は❶（作品→現実）に偏った内容なので不可。
③は「現実世界を意識せずに作品世界だけを味わう」が誤り。そのような〈現実のコンテクストから切り離された作品そのものを鑑賞する〉あり方は、本文では述べられていたが、**【文章】**では言及がないので、「全体の結論」として不適。
④は❷（現実→作品）に偏った内容なので不可。

第2問　小説　牧田真有子（まきたまゆこ）「桟橋」（二〇一七年発表）

（設問中に【資料】として、演出家・太田省吾（おおたしょうご）が演技について論じた文章「自然と工作――現在的断章」が用いられている）

［総　括］

第2問は、現代の作家の作品からの出題。本文は昨年より一〇〇〇字ほど短くなった。設問数は7つで昨年と同じ。**問1**で語句の意味に関する設問が復活する一方、最後の**問7**では**【資料】**の文章を踏まえた生徒と教師の対話による空欄補充問題が登場している。総じて素直な問題であり、本文を丁寧に読むことができれば、迷う問題は少なかったと思われる。難易度は昨年並みか、やや易。

［解　説］

問1　語句の意味を問う問題　基礎

傍線部(ア)～(ウ)の語句の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

「語句の意味を問う問題」では、語句の「辞書的な意味」をベースに選択肢を選んでいく。

(ア)「うらぶれた」の意味は〈落ちぶれてみすぼらしいようす〉。正解は④。

(イ)「もっともらしい」の意味は〈いかにもそのようであるさま。内実とは別に表面を取り繕っているさま〉。正解は④。

(ウ)「やにわに」の意味は〈❶急に。いきなり。❷即座に。たちどころに〉。正解は②。

問2　内容説明問題　標準

傍線部A「おばがいる限り世界は崩れなかった」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

演劇好きの「おば」が子どもたちと行う「ままごと」は、「ありふれた家庭を模したものであったためしは」なく、「子どもには耳慣れないせりふ」も多い。「彼女からは簡単な説明があるだけなので、子どもたちは的外れなせりふを連発する」のも当然のことと言えよう。しかし、それなのに「おばがいる限り世界は崩れなかった」のである。それは、子どもたちの連発する「的外れなせりふ」をその都度「おば」がうまい具合に「世界」に取り込んでいたからなのか、それとも「おば」の演技が圧倒的だったからなのか、詳細は述べられてはいないが、いずれにせよ、「おばがいる限り世界は崩れなかった」のである。ここでいう「世界」とは、「ままごと」の設定、たとえば「うらぶれた男やもめと彼を陰に陽に支えるおせっかいな商店街の面々」が登場するといった設定のことだろう。「正解のイメージ」は次のようなものになるだろう。

馴染みのない設定ゆえに連発される子どもたちの的外れなせりふにもかかわらず、おばの存在によってその設定が保たれていたということ。

この「正解のイメージ」に合う選択肢は①。正解は①である。

①以外の選択肢はすべて「世界は崩れなかった」という表現を正しく説明していない。その点だけで①以外は不適当と判断しても、もちろん良いが、その点以外にも②の「もともと子ども相手のたわいのない遊戯」、③の「子どもたちの取るに足りない（取り上げるほどの価値のない）言動」、④の「奇抜なふるまいを子どもたちに求めるものだった」、⑤の「おばが状況にあわせて話の筋をつくりかえることで」はそれぞれ本文に矛盾する、あるいは本文に根拠を求められないため、不適。

問3　理由説明問題　標準

傍線部B「もう気安い声を出した」とあるが、友人がこのような対応をしたのはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

傍線部Bに至るまでの流れを確認しよう。

話の切れ目にイチナは、「なんと今あのおばが居候中でね」と言った。
←
電話口の向こうに、すばやい沈黙があった。
←
「～懐かしくない？　電話代わろうか」
イチナが冗談半分で勧めると、相手も「結構です」と笑って言ったが、そこには何か、拭いきれていない沈黙が交じっているようだった。
←
「おばさんと話すのは億劫？」とイチナは訊いた。
←
「いや、これ言っていいのかな。おばさんさ、私の家にもちょっと住んでたんだよね。～」
←
言ってしまうと友人は、B もう気安い声を出した。

傍線部の理由として最も重要なのは、傍線部直前の「言ってしまうと」という箇所だろう。友人は、おばと同居していたことをイチナに言ってしまったことで、気楽になったのである。

そのことをもう少し詳しく言い直すと、友人は〈おばさんと話すことを億劫だと思っている〉とイチナに誤解されることを避けるために、これまで話していなかったおばと同居していた事実を告げ、そのことで隠し事をしていたような重苦しい気分から解放された、ということになろう。以上の内容を「正解のイメージ」として選択肢を検討する。正解は④。

①は「同居していたことをおばに口止めされていた友人」が誤り。そのようなことは本文から読み取ることはできない。

②「イチナとの会話を自然に続けようと考えてくつろいだ雰囲気をつくろうとした」が誤り。友人の「気安い声」はそのような意図的、作為的なものではない。

③は全体的に右に見た流れ、そして「正解のイメージ」からズレている。

⑤は「おばがイチナにうっかり話してしまうことを懸念して自分から打ち明けた」が誤り。友人がイチナに打ち明けた理由は、イチナに〈おばと話すことを億劫がっている〉と誤解されることを避けるためである。

問4　行動描写に関する問題　標準

本文33行目から47行目にかけて糸屑を拾うイチナの様子が何度か描かれているが、その描写についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

照れ隠しで頭を掻いたり、驚きのあまり手で口を覆ったり……といった何気ない仕草には、人の内面が表れる。特に、作家によって意図的に表現されている小説内の仕草には、登場人物の何らかの内面が表されていると考えることができる。前後の文脈をふまえて、イチナの仕草・行動から、イチナの内面を推測しよう。

※「　」内はイチナの仕草・行動、（　）内は推測されるイチナの内面

おばが友人の家に居候していたことを知る
←
「糸屑を拾っていたイチナの動きがとまる」（33行目）
（→思いがけないことに驚いている）……❶
おばという人間に対する友人の評価を聞く
←
「イチナは今度は、絨毯の上の糸屑を拾う手をとめない。上手くとめられなかったのだ」（47行目）
（→さほど驚きはない？）……❷

右のように考えて選択肢の検討に入る。

①は、「自分とおばの関係に他人が割り込んでくることの衝撃をなんとか押さえようとするイチナの内面」が誤り。

②は、「友人の家におばが居候していたことに驚かされ」が❶に合致し、「友人が自分の意識していなかったおばの一面を伝えてきたことに揺さぶられるイチナの心のありよう」も❷と矛盾はしない。60行目に「友人の言うとおりなのかもしれない、とイチナは考える」とあることから、友人の伝えるおばの一面を、イチナはこれまで意識してはいなかったのだろう。だから心揺さぶられるのも頷ける。しかし、すぐに「友人の言うとおりなのか

もしれない」と考えるということは、同時に、意識はしていなかったが、言われればそうかもしれないと思う程度には、イチナもおばのことを友人と同様に捉えていたのであり、したがって「思わず手がとまる」ほどの驚きは覚えなかったのだろうと考えられる。正解は②。

③は「おばとの共同生活を悪くなかったとする友人の意外な言葉に接し」が誤り。イチナにとって、思わず手をとめてしまうほどに意外だったのは、そうではなく、おばが友人の家に居候していたことである。

④は「現在とは違いおばに懐いていた頃を思い返すイチナの物寂しい思い」が誤り。

⑤は「おばに対して同じ思いを抱いていたことにあらためて気づいたイチナの驚き」が誤り。驚く対象が違う。

問5　心情説明問題　標準

傍線部C「私はごまかされたくない、とイチナは思う。」とあるが、このときのイチナの思いとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

「私はごまかされたくない」の「は」は区別を表す助詞。ここでは「母だけではない、おばを住まわせた人たちは皆その、果てのなさに途中で追いつけなくなってしまう」との対比で捉える。おばの「果てのなさ」とは、62行目で「たしかにおばには、どこからどこまでがおばなのかよくわからない様子があった。氷山の一角みたいに」と表現されている、おばという人間の内面の輪郭の捉え難さのこと。

整理すると次のようになる。

母や、おばを住まわせた人たちは、おばという人間の内面の輪郭をはっきり捉えることができなかった

⇔

私はごまかされたくない、とイチナは思う

＝私はおばという人間の内面の輪郭をはっきり捉えたい、とイチナは思う

これを「正解のイメージ」とすると、正解は②。

①は「自分だけは迷惑なものとして追及し続けたい」が誤り。

③は「明確な記憶を残させないようおばがふるまっているため」が誤り。

④は「友人や母ですらどこまでが演技か見抜くことができなかった」が誤り。「演技」と〈素〉の境界がわからないのではなく、おばという人間の輪郭が捉えられないのである。また、後半の「自分だけは個々の言動からおばの本心を解き明かして理解したい」も誤り。おばには裏表がなく、すべてが本心のように見えるからこそ、おばという人間の全体像が見えてこないのである。

⑤は「ごまかされたくない」を「おばの居候生活の理由」を「明らかにしたい」と解釈しているので不適。

問6　表現に関する問題　標準

本文の表現に関する説明として**適当でないもの**を、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。

②の「子どもたちの意識が徐々に変化していく様子が表現されている」が不適。18～19行目の「さまざまな遊具の影は誰かが引っ張っているかのように伸びつづけて、砂の上を黒く塗っていく」という表現は、影が長く伸びていくこと＝日が傾いていくこと＝長い時間が経過していること＝おばが「ままごと」に夢中になっていることを示している。正解は②。

問7　【資料】に基づいた、教師と生徒の対話に関する問題　(i)標準　(ii)応用

「おば」は居候する理由をイチナに問われ、「私の肉体は家だから。」（67～68行目）と答えた。この言葉をイチナは「演じるごとに役柄に自分をあけ払うから。」（69行目）ということだと理解した。イチナによるこうしたおばの捉え方について理解を深めるために、教師から【資料】が配付された。以下は【資料】とそれに基づいた教師と生徒の対話である。このことについて後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i)について。次の二つの傍線部はイコールの関係にある。

イチナはおばのことを「X」と思っていました

＝

それは【資料】の「Y」ようという様子がおばには見られないことを示しているのではないでしょうか

このイコール関係を成り立たせる言葉の組合せを選択肢の中から選ぶ。正解は④。

(ii)について。前後の文脈から、空欄Zに入る内容を考える。特に、最後の教師の発言「【資料】では、『自分でないなに者かになりたい』欲求の現れとして演技がみなされていますが、イチナの考えているおばのあり方とは隔たりがありそうですね。」が大きなヒントとなる。

イチナはおばのことを、日常生活でZと考えている

＝

役者としてもおばは様々な役になりきることで自分であることから離れている、とイチナは捉えている

←

「演じるごとに役柄に自分をあけ払う」という言葉につながる

≠

「自分でないなに者かになりたい」という欲求は、自分になりたい（＝〈私〉を枠づけたい）という欲求を基礎とした一つの言い方（【資料】）

以上から、正解は③。

①は「『実現』させたい『自己』を人に見せないよう意識している」が誤り。「様々な役になりきることで自分であることから離れている」と矛盾する。

②は「〈私〉を枠づけたいという欲求」が誤り。そのような欲求はおばにはないとイチナは考えている。

④「『自分になりたい』という『欲求』に基づいて」が誤り。そのような欲求はおばにはないとイチナは考えている。